

国際

KOKUSAI OKINAWA

おきなわ

No.65

第38回 外国人による日本語弁論大会

主催 公益財団法人沖縄県国際交流・人材育成財団

共催 沖縄県、沖縄テレビ放送株式会社

後援 外務省・一般財団法人リョウモ人国際化推進財団・沖縄県教育委員会・公益財団法人沖縄県文化振興会・在沖米国総領事館・独立行政法人国際協力機構沖縄センター
協賛 沖縄セルラー電話株式会社・オリオンビール株式会社・株式会社沖縄ファミリマート・日本トランスオーシャン航空株式会社・従軍ゴールドキングス
協力 パレットグループ



第38回 外国人による日本語弁論大会

2月6日（土）にパレット市民劇場において「第38回外国人による日本語弁論大会」を実施しました。今回は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、無観客での実施となりましたが、11カ国から12名の弁士の皆さんがそれぞれの想いを堂々と発表されました。

沖縄県知事賞に輝いたのは、スリランカ出身のワーラップルマ アーラッチルラゲーさんです。県内の介護施設での仕事ととして、利用者とのしまくとぅばでのコミュニケーションから言葉の大切さについて考えるようになり、その思いを訴えました。

沖縄県国際交流・人材育成財団理事長賞は、ブラジル出身のバラチさんが受賞しました。ブラジルと日本の両方の文化で育った環境でのアイデンティティの葛藤ととして、多様な価値観の重要性に気づき、3ヶ国語を話せる客室乗務員として、自分にしかできないことに取り組むことで、沖縄に貢献していきたいとの抱負で締めくりました。

沖縄テレビ賞を受賞したのは、ミャンマー出身のソーさんです。多様な民族が住まう母国での方言文化を紹介しつつ、アルバイトでの接客を通して若い世代にしまくとぅばがあまり浸透していないことを知り、「ことば」も未来に残していかなければならないものの一つと提言しました。

審査員特別賞を受賞したのは、ネパール出身のアディカリさん。ベッドメイキングをするアルバイト先で、70歳のおばあさんが仕事をする母国ではみられない光景を目の当たりにし、「働きたいと思っている人が働ける社会」の大切さを発表しました。

今回の弁論大会では、参加者一人一人の弁論力が高く、審査員長を務めていただいた外務省沖縄事務所の橋本特命全権大使の講評にもございましたとおり、まさに「甲乙つけがたい」レベルの高い大会でした。

大会開催にあたり、多くの皆様にご協力賜り、心から感謝申し上げます。



受賞者の皆さん

公益財団法人 沖縄県国際交流・人材育成財団

Okinawa International Exchange & Human Resources Development Foundation (OIHF)

〒901-2221 沖縄県宜野湾市伊佐4-2-16

TEL: 098-942-9215

FAX: 098-942-9220

HP: <https://kokusai.oihf.or.jp>

FB: <https://www.facebook.com/oihf60>





沖縄県知事賞 受賞作品

演題 スリランカから沖縄に来て感動している事

特別養護老人ホーム愛の村 Warapperuma Arachchillage, Chathumi Isurika

ワラッパルマ アーラッチルラゲーチャトゥミ イスリカ



アーユボーワン

みなさん、こんにちは。はじめまして！チャトゥミと申します。私は22歳です。

私はスリランカ出身です。現在、沖縄の介護施設で実習をしています。よろしくお願いします。

今日の私のテーマはスリランカから沖縄に来て感動している事についてです。

まず、スリランカについて少しお話ししたいと思います。介護施設で「私はスリランカ人です」と言うと、利用者さんからスリランカはどここの国なのかとよく聞かれます。利用者さんがなぜスリランカを知らないか調べると、スリランカは昔、セイロンと呼ばれていたことが分かりました。皆さんの中にもスリランカの事を知らない方がいるかもしれないので、今日はスリランカについて少しお話ししたいと思います。

スリランカは南アジアのインドの下にある小さな島国です。サイズは、北海道の約4分の3です。小さな島国ですが、たくさんの天然資源があります。たとえば、スリランカでは宝石を手に入れることができます。スリランカは赤道に近い国なので一年中暖かいです。平均気温は28～35℃です。さらに、スリランカは南アジアのミニアフリカと呼ばれることもあります。その理由は、自然豊かな国なので川、海、山、森で溢れ、自然界にはたくさんの動物がいるからです。

スリランカは自然が綺麗だけでなく、料理もとても美味しいです。インドに近いからもちろんスリランカも三食カレーライスです。日本のカレーと違っていろんな野菜で色んな味のカレーを作っています。スリランカから、カレーの調味料はもちろん、ココナッツ、ゴム、あとは世界中で有名なセイロン紅茶も輸出されています。次は宗教についてです。日本と同じように、スリランカは仏教文化の国です。寺院もたくさんあります。仏教徒の他に、ヒンドゥー教徒、キリスト教徒、イスラム教徒もいます。共通語はシンハラ語です。スリランカは観光地としても知られています。是非お越しください。

私は2年前に日本に来ました。埼玉県で1ヶ月講習を受けて、沖縄に来て、介護施設で実習を始めました。初めて沖縄に来て、びっくりした事がいっぱいありました。今私が働いている施設では入居者が100名ぐらいいます。私は実習を始めた時、日本語の挨拶しかわかりませんでした。利用者さんから方言を聴いてから初めて介護の仕事の難しさを実感しました。一緒に働いている職員たちが利用者様にこう言われました。「外人さんだから優しい日本語で声かけてくださいね」って、すると利用者さんも私たちのためにいつも優しい日本語で話してくれました。そのおかげで今は仕事がとても楽しくなっています。

ある日本当にびっくりする言葉が聞こえてきました。一人の利用者さんの居室から「アンマー」と呼ぶ声が聞こえてきたのです。日本に来て初めて日本人からスリランカの言葉が聞こえました。驚いた私は、この話を職員に話しました。すると、もっと驚くべき話が出てきました。沖縄の方言でお母さんのことをアンマーと呼びますと言われました。スリランカも同じようにお母さんのことをアッマーと呼びます。あの日まで興味がなかった沖縄の方言に少しずつ興味が出て学ぶようになりました。

沖縄の人は心優しい人なので私に方言を少しずつ教えてくれました。今仕事中でも少し方言を使っています。日常生活で使う方言、介護職員として利用者のために使える方言をよく使っています。

「チャーガンチューですか」「うさがみそーれ」「くわっちーさびら」「くわっちーさびたん」「わっさいびーん」「朝晩やいびーん」「ニヘーデービル」「立っちみそーれ」「にーぶいですか？」とかよく使っています。

時々方言の発音間違えたりするんですが、利用者の皆様が何回も何回も優しく教えてくれます。方言がもっと楽しくなったのは、沖縄の芝居を見たからです。皆さんは沖縄の芝居を見たことはありますか？私は毎日見えています。今介護施設で働いていることで利用者が好きな芝居が毎日テレビで流されています。芝居だけではなく沖縄歌 三線の歌 みんなよく聞いています。今まで見た芝居の中で私が一番好きな芝居は4つあります。皆さんはわかりますか？

「伊島ハンドーぐわー」「真玉橋の由来記」「仲田幸子の じいちゃん ばあちゃん」「むーむーあんぐわー」

皆さんはこの4つを見たことがありますか？若い人はほとんど見たことないと思います。私は方言があまりわからないので、芝居の内容を利用者さんから教えてもらっています。施設でイベントとかあったら利用者と一緒にみんなを聴きながらカチャーシーをやっています。利用者もとても楽しんでます。

私は、このような沖縄の方言に興味を持ってから分かった事が一つあります。最後に今日のスピーチで一番伝えたいことを話します。皆さんBEGINの「しまんちゅぬ宝」聴いた事ありますよね。聴いたことがない人はいないと思います。この歌の中で沖縄の宝のことをいっぱい話しています。これを聴いて泣いたこともあります。スリランカも沖縄のような島なのでこの歌にとっても共感します。テレビでも映っていない、ラジオでもながされていない日本の一番の宝ものは沖縄ではないでしょうか？ナイチの人は知らない文化が沖縄にはあります。皆さん覚えていますか？沖縄の首里城の火災から一年が経ちました。私にとって首里城は沖縄の一番宝ものだと思っていました。しかし、沖縄には方言があります。「ウチナーグチ」みなさんできますか？

今の沖縄の若い人たちはウチナーグチをあまり使っていない気がします。一緒に働いている若い沖縄の人でも利用者さんの言葉に対して「全然わからない方言です」と言うことも多くあります。だんだん沖縄から離れていく方言を誰が守るのでしょうか？外国人として私ができる事は本当に少ないと思います。それでも私はできるだけ利用者と一緒に方言で話していきたいと思います。

皆さん少し考えてみてください。今のお年寄りが沖縄の方言を喋っているから、今の若い世代が少しだけ方言を知っているかもしれません。しかし、今の若い世代が年を取ったとき方言を使うと思いますか？その後の世代がこの素晴らしい方言をどうやって勉強すると思いますか？今日このスピーチの中で私が一番言いたかったのは「大切な沖縄の方言を守りたい」と言う事です。皆さんもこの機会に失われてゆく方言について今私たちができる事を少し考えてみませんか？

ニフェデービタン。

沖縄県国際交流・人材育成財団理事長賞 受賞作品



演題 2カ国の文化で育った私がJTAの客室乗務員として今思う事

日本トランスオーシャン航空株式会社 Wisentainer Kyama Barrachi, Vanessa

ウセンタイナ コヤマ バラチ バネッサ

皆さま、こんにちは。今日は、ブラジルと日本の文化で育った私の今まで感じてきたことと現在の仕事を通じ感じていることについてお話し致します。私は1996年ブラジルで生まれ、0歳8ヶ月の時に日本へ来日致しました。当時ブラジルの治安の悪さに悩まされていた両親は、先に日本に移住していた友人から日本の治安の良さを聞き、姉と私の将来を思い日本へ移住する事を決心したそうです。

私が日本の文化に触れ始めたのは3歳の時です。日本語が分からない状態で保育園に入園し、最初の頃はジェスチャーを使って先生やお友達とコミュニケーションをしていたそうです。私が「自分は周りの子と違うんだ」と感じるようになり始めたのは、小学校に上がってからです。当時、私が住んでいた所には外国人が全くいなかった為、街中では「あ、外国人だ」と指を差される事もありました。悲しいと感じた事は記憶にありませんが、なぜか「私も日本人になりたい」と思うようになったことを鮮明におぼえています。

学生の頃は、家にいる時間よりも学校等外にいる時間が長かったので、日本人らしさが自然と身についてきました。特に性格の面です。完璧を求め過ぎる所や、周りからの視線を気にし過ぎる所です。母からも日本人みたいに真面目過ぎるとよく言われていました。

大学生になると、それまで日本人しかいなかった学校生活とは異なり、同じブラジル国籍や他国籍の生徒が同じ学科に在籍していました。これまで『日本人』として生きていた私が『ブラジル人』として生きなければならぬとハッと、慣れない『ブラジル人』を演出して大学生活を送る様になりました。例えば、南米出身の同級生とはハグをしたり、わざわざポルトガル語で話したりと周りにブラジル人として認められたいと思いながら大学生活を送っていました。勿論、約20年間『日本人』として生きていた為、『ブラジル人』を演出する恥ずかしさがあったと同時に『ブラジル人らしい』彼らを見て、羨ましさや悔しさがありました。私は完璧な日本人になる事もできなければ、ブラジル人になる事もできない、中途半端な人間だと思っ様になったのです。両親にそんな話をしていたら、両親から「誰だって完璧になる事は出来ないし、自分に誇りを持って生きていけばいい。」と言われハッとしました。なぜなら、今まで『完璧』という言葉に囚われ過ぎて、自分にネガティブな評価ばかりつけていたと気付かされたからです。そして大学4年生の時に3カ国語を話せる事、カナダ留学を通じて異文化を理解し尊重出来る事が私の強みであると胸を張って言える様になりました。就職活動の際、その強みを活かせるのが、多様な文化と積極的にふれあい、異なる文化、価値観を尊重する社風のある弊社JTAを志望し入社致しました。

現在、JTAの客室乗務員として、しまくうば普及活動に取り組んでいます。しまくうばがユネスコが消滅の危機に瀕する言語に認定しているというのを知り、沖縄本島・宮古島・石垣島のしまくうばを学びたいと思いました。弊社においては、機内アナウンスで、しまくうばアナウンスを取り入れており沖縄らしさの演出の一つとして定着しています。県外のお客さまには勿論、地元のお客さまにもご好評頂いており、そのバリエーションの一つとしてしまくうばアナウンスの動画を撮影し、同僚の客室乗務員へ紹介するなど、私にできることを探しながら業務に臨んでいます。

また、先日ブラジル人のお客さまが車椅子でご搭乗された際に、ポルトガル語で車いすの案内や、機内設備についてご案内することができました。降機の際には、「とても心強かったです。同じブラジル人としてあなたの活躍を誇りに思います。」と仰って下さいました。

今後も、多様性を理解し尊重できる私の強みを活かし、自分にできること、自分にしかできないことを積極的に広め、JTA客室乗務員として沖縄に貢献できるよう精進してまいります。

以上でスピーチを終わります。ご清聴ありがとうございました。

沖縄テレビ賞 受賞作品



演題 しまくうば

シルバーケア夢 Soe, Htut Aung

ソー トゥツ アウン



ハイサイ グスーヨ、チューガナビラ。ワンネー ソーヤイビーン。ユタシク ウニゲーサビラ。みなさん、沖縄の方言を知っていますか。沖縄に住んでいて、方言を使う機会はありますか。

留学生として、ここ沖縄に来て、沖縄にも方言があることを知りました。そして、私の母国、ミャンマーも方言を使う民族なので、沖縄の方言に興味を持ち始めました。ただ、びっくりしことは、沖縄の人はほとんど方言を話さない、標準語を話しているということでした。私の国、ミャンマーでは民族の方言を必ず使います。ここ沖縄とは逆に方言を使わなければ、おかしいと思われます。

さて、どうしてここ沖縄では方言をあまり使わないのでしょうか。独特の文化や歴史を大切にしている、ここ沖縄でどうして方言をあまり使わないのか不思議でなりませんでした。そして、そのことについて学びました。昔、沖縄は琉球王国という1つの国でしたが、その時代がおわり、沖縄の人を日本人とおなじようにするため、1940年に標準語を使うようにし、標準語の強制や方言の禁止、使ったものに罰を与えるなどされ、方言を使う人がすくなくなってきたと聞きました。

また、沖縄戦で方言を使うと、日本軍にアメリカのスパイとみなされ、日本軍にころされることもあったと聞きました。そのときの沖縄の人の気持ちはどんな気持ちだったのでしょうか。自分たちの誇りのある言葉を使えないことは、とてもくしかつたのではないのでしょうか。それから、日本は先進国となり、若い人は家族と離れ、仕事をしたり、生活をしたりする人も増え、昔の大家族から核家族なり、おじー、おばーの方言を耳にする機会がすくなくなってきました。ちょっと話はそれますが、最近のあかちゃんは、おじー、おばーを見ると、ないてしまうと聞きました。しわくちやの顔がこわい、おじーおばーなれしていないとも先生から聞きました。話のもどって、そのようないろいろな理由で沖縄では方言を使う、使える人がすくなくなってきました。

さて、方言に興味がある私は、昨年まで通っていた日本語学校でも少し方言を使ったり、アルバイト中に方言を使ったりしていました。

ある日のことです。アルバイト中、おばあさんがお客様としてきました。そのおばあさんに、「ありがとう」を沖縄方言で「ニーフェーデービル」と言ってみました。すると、あばあさんは驚いて、「あいえーなー、あなた方言わかるの?」「あなたどこの出身の人ね?」と聞かれて、私は「ワンモ ウチナンチュューヤッサー」、私も沖縄の人ですよと答えました。私のことを外国人だということを知っているそのおばあさんは、喜んでいました。年配の方に方言を使うと、とても喜んでくれます。それから、アルバイト先のおばあさんに方言の本を借りたいと相談したら、わざわざ私を図書館に連れて行ってくれました。図書館にはいろいろな方言の本がありました。しかし、若い人たちの反応は違いました。アルバイト先の若い男性に「イチャリバチョーデー」一度出会ったら、みな兄弟。他の高校生に「チュラカーギーやっさー」あなたきれいですねと言ってみたら、信じられないことに方言が通じなかったのです。とても簡単な方言なのに、沖縄の若い人の中には「自分が生まれた場所の方言さえも」わからない人もいるんだと思いました。

そのとき私はすこし悲しかったです。その沖縄のわかものたちに、もっと沖縄のことを勉強したほうがいいとも思いました。その話を学校の先生にしたら、「今は方言をなくさないために、未来に方言を残すために、がんばっている人たちもたくさんいる」と聞きました。

小中学校の学校の授業で「方言」に触れてもらう授業があったり、イベントなどでは、方言のあいさつなどを積極的に使ったり、沖縄の人気歌手による方言バージョンの歌があったり、大学生による方言のラジオ番組があると聞きました。それを聞いて私は少しほっとしました。なぜなら、なくさないために努力している人たちもいることを知れたからです。

未来に残していかないといけないのは、文化、伝統的な服、料理、習慣だけではありません。方言もその大切な1つです。なくなってからでは遅いのです。それを守るのは若い人たちの方言に対する興味と力が必要だと私は思います。もっともっと若い人たちに目を向けてほしいです。そして、方言が使える若い世代がもっと増えてほしいです。

ご清聴ありがとうございました。 ニーフェーデービル。

審査員特別賞 受賞作品

演題 お金を稼ぐことの大変さ

ゴレスアカデミー日本文化経済学院 Adhikari,Rajan
アディカリ ラザン



私が母国ネパールにいたときに考えていた日本のイメージは、正直「お金」だけでした。日本へ行って、いい教育を受けて、いつか私も立派なビジネスマンになって、たくさんのお金を稼ぎたいと思っていました。しかし、実際日本へ来てみると、私の考えは大きく変わりました。「働いてお金をもらうということが、どんなに大変なことか。」それが今わかりました。ネパールで仕事をした経験がなかったので、働くのは日本が初めてでした。ネパールではレストランの洗いの仕事や、ホテルのベッドメイキング、掃除などは、レベルの低い仕事として見られ、ネパール人はやりたがりません。いわゆるブルーワーカー、体を使う仕事はまったく人気がありません。私もネパールにいたころは、日本でそんな仕事をすることになるとは思っていませんでした。しかし、実際私が日本ではじめてやったアルバイトはホテルのベッドメイキングの仕事でした。当時、私はぜんぜんやる気がなくて、一つの部屋を40分以内に掃除して、きれいに整えなければならなかったのに、倍の時間、1時間以上もかかっていました。同じ職場に70歳のおばあさんがいましたが、文句も言わずにすごいスピードできれいに仕事をする姿を見て、本当に驚き、私の甘い考えは打ち砕かれました。本当にショックでした。ネパールでは結婚した女性は主婦になり、外へ働きに出ることはほとんどありません。ましてや、70歳の、体が小さくなって、白髪になったおじいさんやおばあさんが働くのは本当にありえないことです。おばあさんがすごい速さで仕事をするのをはじめて見たときは、「日本はお年寄りにやさしい国ではない」と思いました。息子や家族がお年寄りの面倒を見るのは当たり前ではないのでしょうか。どうして70歳にもなって、仕事をするのでしょうか。

日本に来て、1年以上たった今でも同じ気持ちを持っていますが、でも、今は、もう一つの感情があります。それは、「お年寄りも元気に働ける国だ」ということです。70歳のおばあさんが、22歳の私よりも速いスピードで、またすごいやる気を持って仕事をしている姿は、ある意味で感動します。私の国では70歳になって仕事がしたいと思って、やらせてくれる職場はないでしょう。70歳になっても働くか、働かないか。どちらがいいか、悪いか。それは関係ありません。大切なことは、

「働きたいと思っている人が働ける社会である」ということです。

「働いてお金をもらうこと」は本当に大変なことです。それを今、痛感しています。日本では「どんな仕事でも、スピード」つまり「時間」と「やる気」が大切なのだとわかったのです。

去年は新型コロナの流行によって、私のアルバイトもたくさん変わりました。去年のはじめはコンビニで働いていましたが、勤務時間が急激に減ったので、ホテルのベッドメイキングの仕事にもどりました。それもすぐに勤務時間が減ってしまい、ほとんど働けなくなってしまったので、今はハンバーガーショップでアルバイトをしています。あたえられた仕事をきちんとやること、時間を守ること、ルールを守ること、これらはとても基本的な、ごく当たり前のことかもしれませんが、私は日本に来て、「働いてお金をもらうことの大変さ」そして「その大切さ」を学びました。

新型コロナとの戦いが、いつ終わるのかわかりません。母国からの仕送りが減っていますので、私の日本での生活がいつまで続けられるか、それもわかりません。不安ばかりの日々ですが、私はまだまだラッキーなほうです。私より困窮している人々が大勢います。自分がやるべきこと、やったほうが良いことをよく考えて、来日する前に掲げた目標、「立派なビジネスマンになって、お金が稼げる」ように、日本で頑張っていきたいと思っています。

日本語弁論大会の様をYouTubeで視聴できます！

日本語弁論大会 **YouTube 配信情報!**
Stream on OIHF Official YouTube

ホームページ内、
新着情報をチェック!
Please visit our website and check "Update"

ストリーミング配信
YouTube QRコード
Scan the QR code

配信期間 **2021年 2月22日(月)~**

Delivery period: From Monday, February 22nd, 2021

kokusai.oihf.or.jp

検索



※閲覧にはインターネット環境が必要です。※インターネット接続やパソコン機器に関する問い合わせには対応出来かねます。
*Internet environment is required for browsing. *We cannot respond to inquire regarding Internet connection or personal computer equipment.

大会の様



順番を待つ弁士



会場の様子



弁論の様子



大会に臨む弁士



審査講評



多文化共生？

(公財)沖縄県国際交流・人財育成財団 国際交流課長 根来 全功



新型コロナウイルスによって、世界中のあらゆる人が影響を受けました。

その影響は、保健医療という感染者の治療に関する直接的なものにとどまらず、政治や法律、経済・ひいては私たちの生活にも及んでいます。

これまで、なんとなく遅れていることに気づいてはいたけれど、先延ばしにしていた「デジタル化」や「リモートワーク」「労働生産性」などの言葉が以前にも増してクローズアップされるようになり、「密室談合」や「予定調和」はたまた「メンバーシップ型雇用」や「働かないおじさん」に至るまで、“日本では、それほど問題視されてはいなかったけれど、ひょっとしてこれは、世界の標準からズレているのではないか？”ということに、否が応でも気づかされることになりました。ただしこれらは、時代の流れであり、いずれそういう方向に行かざるを得ないことは、誰もが薄々わかっていたはずですから、コロナはきっかけでありこそすれ、原因ではないように思います。

そう考えると、我々が取り組んでいる「多文化共生」なるものも、現在の環境下で急激な変革を迫られているような気がします。

多文化共生とは「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」(2006年 総務省 多文化共生推進プラン)と定義されています。

これはあくまで、以前の「郷に入っては郷に従え」的な考え方の失敗に気づいて設定されたゴールです。それに向かっていけば、現状はまだ「道半ば」であって、今直ちにそうであることまでは必要ないことはわかるのですが、道半ばにしても、「互いの文化的ちがいを認め合い」「対等な関係を築こうとしながら」共に生きていくことがいかに難しいかを、日々感じています。

例えば、事例を挙げるのはあえて避けますが、相談を受けて「あなたの場合は、これこれこういう法律に当てはめて考えると、こういうことが考えられますので、こういう対処が必要でしょう」というような説明をするときに「あなたの国では、このような考え方を取るのかもしれませんが、日本では当時こういうことがあって、こういう立法趣旨に基づいて、この法律ができたので、こう考えます。」ということまで、時には付け加えて説明しないと「互いの文化的ちがい」を認め合ったことにはならないのではなからうか？

その上で方向性を示さなければ、いつまでたっても「どうして？」という相談者の根本的な疑問は解決されないし、真に理解を得るのは難しいのではと考えるようになってきました。

・・・と、こんなことを思いながら「多文化共生」について、では一体今後なにができるのかと考えています。

先に述べましたように、様々な外部環境によって、既存の取組の変革も必要になるでしょう。

あれこれ企画や相談対応などをしていると、今日も一日暮れていきます。

あれ？ これって「働かないおじさん」!?



「働かないおじさん」!?



リモート講座にて

2020年度「災害危機管理ウェビナー」を開催

去る1月13日(水)に名古屋大学減災連携研究センターのセンター長 福和伸夫氏を講師として「過去の災禍に学び幸い転じて福と為す」と題してご講演いただきました。ウェビナーには行政や関連団体の職員、またOIHFの「災害時外国人支援サポーター」等、43名が参加しました。

講演では、災害・感染症の歴史と世界史・日本史の年表を比較し、過去の災害や疫病が改元や革命、ルネッサンスなど時代を動かす原因となることを解説されました。このことから今日頻発する洪水などの激甚災害や新型コロナウイルス感染症の蔓延が、現代社会の大転換をもたらすきっかけとなり得るとのお話もありました。

また、現代の日本において阪神淡路大震災以降、高齢化社会が進み国の借金が倍増するなどして、国力が低下する中において、自助を含む個の総力の結集の大切さや、今後起こりうる巨大地震や感染症、強大化する風水害を乗り越えるためには、ヒト・モノ・コトなどの様々な要素や分野を超えた新たな価値観や取り組みが必要になるとも説きました。

参加者からは、「目の前の防災課題の解決だけでなく、過去の災害を紐解き、そこから学び、持続し、つながる備え方を考えていかなければならないことを痛感した。災害をこのような

視点で考える機会が少ないため、本講演は非常に有益な機会となった。」や「俯瞰的な視点や統計的な数字で災害を考えることの重要性や、災害から連鎖的に発生する隠れているリスクを知り気づくことができた」、また「未曾有の自体に柔軟に対応できる新しい社会づくりを今、整える必要性を強く認識した」などの意見が寄せられました。

福和先生がお住まいの愛知県では、新型コロナウイルスに関する緊急事態宣言が発令されています。過年度のように来沖いただくことは叶いませんでしたが、今回も貴重なご講演をいただき心から感謝申し上げます。



イベント情報

～詳しくはHP (<https://kokusai.oihf.or.jp/>) まで～

災害時外国人支援サポーター養成講座 参加者募集

目的
「防災・減災」に関する知識を深め、島嶼県沖縄の地域防災力の向上を目指し、被災する外国人をサポートしながら行政や地域住民との橋渡しを担うことができる人材を育成します

実施場所
■第1回～第4回：ZOOM
■第5回：沖縄産業支援センター

講座修了認定 受講無料
講座(全5回)受講者を「災害時外国人支援サポーター」と認定し受講者証とIDを付与します(2021年3月31日迄、本県と県外において214名が修了しています)

参加要件
島嶼県沖縄の地域防災力の向上や外国人支援に興味がある方

募集人数 40名程度

募集期間等
■2021年3月14日(日)～4月18日(日)
■ウェビナーの詳細等はHPにて!

応募先着順とし、定員に達し次第締切!

OIH HP QR →

お問い合わせ：(公財) 沖縄県国際交流・人材育成財団 国際交流課 (OIH)
TEL: 098-942-9215 HP: <https://kokusai.oihf.or.jp/> FB: <https://www.facebook.com/oihf60>

災害時外国人支援サポーター養成講座

島嶼県沖縄の地域防災力を高め、大規模災害時にOIHFが開設する「多言語支援センター」と協力して、外国人の支援を担うことができる人材の育成を行います。全5回受講された方は、当財団の「災害時外国人支援サポーター」に認定し、受講証書とIDを付与します。

募集人数：40名程度

募集期間：2021年3月14日(日)～4月18日(日)

医療通訳者養成講座 受講者募集

目的
県内在住外国人が安心して地域の医療機関を受診できるように、医療通訳者として活動できる人材を育成します。

定員 各言語10名程度
募集要項、申請書の内容に基づき受講者を選出します

募集対象
次の要件を満たす方
(1) 全講座(4回)の受講と認定テストを受験できる方
(2) 医療通訳ボランティア事業に強い関心を持ち、受講希望言語でビジネスレベルのコミュニケーション力を有する方

養成対象言語 英語・中国語 受講無料

実施場所 当財団内3Fホール

募集期間等
2021年4月5日(月)～5月16日(日)
詳細は、HP(<https://kokusai.oihf.or.jp/>)で確認することができます。

お問い合わせ：(公財) 沖縄県国際交流・人材育成財団 国際交流課 第1大児童
TEL: 098-942-9215 FAX: 098-942-9220
HP: <https://kokusai.oihf.or.jp/> FB: <https://www.facebook.com/oihf60>

医療通訳者養成講座

県内在住外国人の医療機関への受診をスムーズに支援する「医療通訳者」を養成するための講座を実施します。全講座を受講し認定テストに合格された方を、OIHFの「医療通訳者」と認定し、必要に応じて医療機関や自治体に紹介します。

養成対象言語：英語・中国語 <各言語10名程度>

募集期間：2021年4月5日(月)～5月16日(日)

日本語教室

日本語の読み・書きの指導、日常生活に必要な日本語の指導



オンライン授業<20名程度>

2021年4月20日～2022年3月15日
火曜日のみ【10:00～12:00】

対面授業<10名>

2021年4月16日～2022年3月18日
金曜日のみ【19:00～21:00】

**募集期間：2021年4月～財団HPにて
(定員になり次第締め切りにさせていただきます)**

賛助会員の募集・寄付のお願い

(公財) 沖縄県国際交流・人材育成財団 (略称「OIHF」) は、本県の未来を見据えた多文化共生社会の実現をを目指し、ダイバーシティを尊重する地域づくりと人材育成を推進しております。

一方、基本財産運用利率の低迷や県補助金の減額、委託金の廃止などOIHFの運営は大変厳しい状況にあり、今後安定した事業を展開するためには、皆様の支援が必要となります。新型コロナウイルス禍の中、誠に恐縮ではございますが、賛助会員へのご加入やご寄付など皆様のご協力をお願いいたします。

【年会費】 個人：3,000円 団体：10,000円

お申し込み・お問い合わせは国際交流課まで TEL:098-942-9215 Email:kokusai@oihf.or.jp



その他法人賛助会員様： 沖縄八ワイ協会 沖縄ツーリスト 沖縄県商工会連合会
パシフィックホテル沖縄 沖縄市国際交流協会

OIHFでは様々な外国人支援に取り組んでいます！

窓口に相談に来た外国人の方へ

■暮らしのこと、家族のこと、仕事の悩み、など

あなたが困っていることは何ですか？

私たちは 沖縄県国際交流・人材育成財団 国際交流課です。
沖縄に 住む 外国人 の みなさんのお手伝いをしています。

相談にお金はかかりません (無料)、秘密は守ります

誰に相談したらいいかわからない

誰かを助けてあげたい、でもどうしたらいいかわからない

COVID-19 Coronavirus
コロナで困っていませんか？

あなたが困っていることを私たちに教えてください。
必ずお話をじっくり聞いて、お答えさせていただきます。
覚えておいて、どうすればいいかわからない、一緒に解決しましょう。

TEL: 098-942-9215 E-mail: kokusai@oihf.or.jp

外国人のための法律・生活相談

外国人が地域住民として直面する様々な問題について、日常的に相談できる窓口を開設しています。多言語による生活相談や、沖縄弁護士会との連携により、在住外国人の生活面や在留資格、労働面等を専門的に支援するための法律相談会を必要に応じて実施しています。

COVID-19に伴う雇い止めや在留期限の延長に関することなど、多様な相談が寄せられ、対応しています。守秘義務は厳守します。些細なことでも結構ですので、困ったことがありましたら、お気軽にご相談下さい。対面や電話、メールはもちろん、FBのメッセージでも受け付けています！

周囲の外国人の皆様にOIHFの相談窓口について情報を拡散していただけますと幸いです。

E-mail: kokusai@oihf.or.jp
FB: <https://www.facebook.com/oihf60>

